

哺乳子豚に対する局所保温 ～分娩舎での注意点

分娩舎は体重 200kgを超える母豚と 1~6kg程度の哺乳子豚が共存する空間であり、その温度管理は季節を問わず苦勞する。とりわけ哺乳子豚の温度管理は重要である。今回は哺乳子豚に対する局所保温について解説する。

●哺乳子豚の適正な温度環境

一般に、子豚は体温約 40℃の母豚から生まれた直後から、低い温度環境に曝される。加えて子豚の体表は母豚の羊水で濡れており、体感温度はさらに低くなる。そのため重要なのが保温である。哺乳子豚の適温域は、生後は 35℃、その後は日齢とともに下がっていく（表 1）。このため、夏場でも夜は暖房器具が必要となる。

表 1：哺乳子豚の適温域

生後日齢	分娩～2日	3～4日	5～6日	7～14日	15～20日
温度	35℃	34℃	32℃	30℃	28℃

●保温方法の種類

分娩豚房での保温方法にはいくつか種類がある。一般的なのはガスブルーダーとコルツヒーター。ガスブルーダーは発熱量が大きい、不完全燃焼による一酸化炭素の発生や火災の危険を注意しなければならない。コルツヒーターは赤外線ランプを使ったもので、ガスブルーダーより安全であるうえ、電気式なので操作性や作業性に優れる。その他にも赤外線電球、電気保温マット、床暖房（電熱線式、温湯式）などがある。また、暖房器具と併用して保温箱の設置も保温効果を高める良い方法である。保温箱に子豚が寝るようになれば圧死対策にもなる。

●コルツヒーター使用時の注意点

今回はコルツヒーターの使用上の注意点を確認したい。表 2 は全農飼料畜産中央研究所において検証した、設置時の高さや床材の表面温度の違いである。コルツヒ

表 2：床表面温度（真下）に与えるコルツヒーターの高さと床材の影響
（単位：℃）

ヒーター条件	素材				
	ゴムマット		ベニヤ板		
ヒーター OFF	15.3		16.3		
ヒーターの強弱	強	弱	強	弱	
高さ	30cm	63.4	41.1	45.3	37.8
	40cm	51.1	33.8	37.4	32.4
	50cm	43.4	29.1	30.4	27.3
	60cm	36.3	25.4	26.8	24.6

※室温 18.5℃

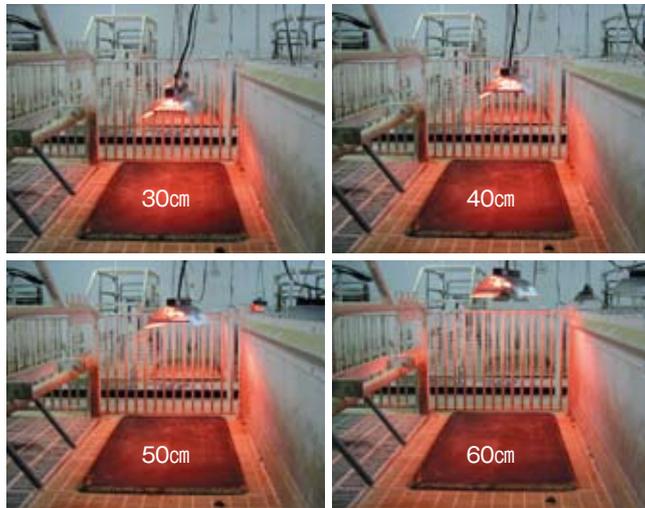
※コルツヒーター：NK-RH22CE 単相200V-300W

ーターは、スイッチで強弱の切替えが可能なので、その違いについても示した。ゴムマットとベニヤ板ではゴムマットが同じ高さで比較して表面温度が高かった。また、強弱の温度差もゴムマットの方が大きかった。注意したいのは、ゴムマットで高さ 40cmの「強」では真下の温度が 50℃を超えていることだ。これでは熱すぎて子豚は真下では寝られない。ただし、図 1 の通り、周辺温度



測定に使用した赤外線放射温度計（AD-5615、エー・アンド・ディ社、メーカー価格5,880円）

は低くなるので、豚はヒーターから少し離れ、快適な場所を選ぼうとするのだが、その床面にゴムマットが無い場合には、腹冷えを起こす可能性もある。従って、コルツヒーターを使う場合、豚がどのような状態で寝ているかを観察して、ヒーターの強弱と高さを調節することが大切である。今回の測定には簡易な赤外線放射温度計を使用した。数千円で買えるもので十分であり、この冬分娩舎では是非確認してほしい。



コルツヒーターの高さ

図 1：コルツヒーター中心からの位置と床表面温度（℃）
（高さ40cm、強、ゴムマット）

